

# カハルウの記憶：オキナワン2世の意識と私たち

磯, ステファニー侑子 / ISO, Yuuko STEPHANIE

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 = Journal of international Japanese-studies / 国際日本学論叢 = Journal of international Japanese-studies

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

80 (1)

(終了ページ / End Page)

61 (20)

(発行年 / Year)

2015-02-27

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012067>

# カハルウの記憶 －オキナワン2世の意識とかたち－

日本文学専攻博士後期課程3年

儀 ステファニー侑子

## はじめに

2013年の時点でのハワイ州の人口は約1,404,054人。その内オアフ島に住む人の数は約983,429人。さらにオアフ島に暮らすアジア系の人口は43.3%で、アジア人が経営する会社は2007年の時点で56.6%となっている (United States Census Bureau)。混血が進む今日、ここから日系人のみの人口、ましてオキナワンのみの人口を導き出すのは困難である。しかし人種や民族の境界が無い中で、今でもハワイには「オキナワン」という意識が存在し続けている。なぜ「日系人」「ジャパニーズ・アメリカン」ではなく、「オキナワン」「ウチナンチュ」なのか。また、なぜオキナワンという「意識」を受け継いでいくことが可能であったのか。さらにこの二つの点を検証していく上で、カハルウ (Kahaluu) という地域を取り上げ、プランテーション以外でのオキナワンの様子を記録する、この三点が本論文の目的である。その方法としてまずハワイのオキナワン2世間の意識の違いを「1. オキナワン2世とは」の中で検証し、次に実際カハルウ (Kahaluu) で生まれ育ったオキナワンの事例をもとに、実際にはどうオキナワンとしての意識が形成されたのかをインタビュー内容から検証し「2. カハルウ・コミュニティ」の中で論じた。結果そこから見えてきたものは、生活基盤のなかに沖縄の衣

## カハルウの記憶 - オキナワン2世の意識とかたち -

食住が残っていた場合、プランテーションのような閉ざされたコミュニティ（共同体）の中でなくとも、受け継がれていくことは可能である、ということである。

そもそも「オキナワン」というアイデンティティ、つまり「意識」が形成されるきっかけのひとつとなったのはプランテーション労働である。プランテーションという一種の共同体の様相は以下に示した通りである。

プランテーションでは、職種・賃金・居住施設・居住空間などは人種や性別、来布時期などに応じて不均衡に配分され、グループ間の序列関係を厳格にすることでマイノリティ間の連帯を防ぐ分割統治システムが実施された。（中略）アジア系移民たちに対しては、下級労働者層の中にさらに設けられた序列に従ってグループごとに居住施設の材質や設備、立地条件などの面で差異化がはかられた。当然、日本人も「ジャパニーズ」としてハワイ社会の下層に配置され、過酷な労働・生活環境と露骨な人種差別に苦悩する日々が続いていた（岡野、2010）。

岡野宣勝は、オキナワン・アイデンティティの形成には、肉体的苦痛の他に、「マイノリティ」としての精神的苦痛という一面もあったという点を強調している。オキナワンという意識を形成させる動機がプランテーションにあったということは認める。が、しかし、プランテーション・コミュニティ（共同体）が衰退・崩壊した後に次の世代へと受け継がれていった「意識」は、これまでプランテーション内にあった日本人とオキナワンの差別から発生したオキナワンとしての意識だけだとするこれまでの研究に対して、それが全てではないということの意味している。つまり、プランテーション崩壊後の意識を検証していく上でより重要な視点として、家庭

やコミュニティの中で、沖縄の言語や文化に接して育ったことの重要性が見落とされてはならないということである。その点を明らかにするために、あえて日系人との接触の少なかった地域を取り上げ、インタビュー調査を行った。それがカハルウ (Kahaluu) である。

オキナワンであることを受け継いだ共同体のひとつとして、カハルウ (Kahaluu) という地域に着目した。カハルウ (Kahaluu) は「オキナワン・タウン」(Ige, 1989) と言われるほど、沖縄に先祖をもつ人々が集中して暮らしていた地域であった。プランテーション労働が衰退していった後、オキナワンが移り住んだ地域のひとつである。オキナワンは、これまでのプランテーションという共同体から抜け出し、カハルウ (Kahaluu) という新たな共同体に属するようになった。しかしこの共同体はプランテーションという共同体とは性質が異なる。職種も様々な、それぞれの家族が独立して暮らしている共同体である。そのような中で、どのようにしてオキナワンという意識が受け継がれていったのかを検証する上で、カハルウ (Kahaluu) という地域像を描き出すことが重要で、家庭やこの地域の中にあった沖縄の文化に接し育ったことが、オキナワンであることへの意識を形作っていったのではないかと考える。またプランテーション以外でのオキナワンの暮らしを記録するものは少なく、今後の研究の一資料として補うこともカハルウ (Kahaluu) を取り上げる理由である。

本論はプランテーション衰退・崩壊後のオキナワンの様子を論ずるものであるため、その対象はオキナワン2世が大部分を占める。ではオキナワン2世とは、どういった世代なのであろうか。

## 1. オキナワン2世とは

沖縄の人々が1900年にハワイへ移住を開始し、やがてそこで家庭を築い

## カハルウの記憶 - オキナワン2世の意識と私たち -

ていった。ハワイで生まれた子どもたちは、アメリカ国籍を有し、アメリカの教育を受けて育った。2世が自分たちをオキナワンであると意識するようになる背景に、その者の育った環境がある。環境というのは人に大きな影響を与える。例えばプランテーションでの生活である。彼らの多くは日系人(日本本土からの移住者)とオキナワンとの間の差別意識を感じながら生きた。プランテーション生活に関する記録は*Uchinanchu: A History of Okinawans in Hawaii* (1981) や *Kodomo no tame ni* (Ogawa, 1985) などにも記されている。このような境遇を全てのオキナワン2世が経験したとはもちろん言えない(インタビューを通して、オキナワン2世であっても年齢によって差別を感じなかったと語る人物もいた)が、自分がオキナワンであると意識する、一要因だったのではないだろうか。その他、家庭環境もオキナワンであることを意識する重要な役割を果たしている。

オキナワンの家庭では、沖縄の料理が食卓に並んだり、三線の音色が聞こえてきたりした。沖縄の方言もよく耳にした。オキナワン1世は英語を話せない、あるいは片言しか話せなかったため、沖縄の方言で会話をしたり、沖縄方言、日本語、英語などを混ぜた会話(ピジン・イングリッシュ)をしていた。沖縄の言葉を話す・聞くこともオキナワンであることを2世が意識する要因である。

歴史さえもオキナワンであることを意識させる要因となり得る。日本が真珠湾を攻撃したことにより、アメリカ・ハワイに住む日系人とオキナワンの立場が悪くなる。それまで、「日系人」や「オキナワン」だと民族の違いを意識してきたが、太平洋戦争により、日系人とオキナワンを隔てる壁は

七七  
無くなり、「日本人」または「ジャパニーズ・アメリカン」として見られるようになる。ここで一度両者を区別する意識は無くなった。再びオキナワンであることへの意識が浮上することとなったのは、戦後であろう。それ

## 国際日本学論叢

もオキナワンであることへの意識は、これまでの劣等感から誇りへとかたちを変えていた。

戦後大きな打撃を受けた沖縄を、ハワイのオキナワンたちは支援した。食料、特に豚を中心に支援したり、養豚の技術を教えたり、親戚・家族がいる者は仕送りもした。様々な面で戦後の沖縄を支えた。これを機に、オキナワンであることを誇りに感じるようになってきたのではないだろうか。

以上のようにオキナワン2世の多くは、オキナワンであることに対して、様々な意識の変化を経験してきた。劣等感に満ちた時期と、第二次世界大戦を経て芽生える誇りという感情の両方を経験した。このような意識の変化を実際に経験した人物の記録がここにある。彼の名前はフィリップ・K・イゲで、オキナワン2世である。

Among other things, I'm an Okinawan, but if you should ask me what it feels like to be an Okinawan *nisei* in Hawaii, I would have a hell of a time answering you. But for sure I can tell you I don't feel inferior or superior to others just because my father and mother came from Okinawa of the Ryukyu Islands. I'm glad, of course, that they did, for that made me "Hawaii-born," with all the rights, opportunities and responsibilities of an American citizen. I don't feel particularly "different" from other Japanese Americans in the Islands. In fact, I don't feel particularly "Okinawan," if that makes any sense. But it wasn't like that in the beginning. No, it wasn't like that for a long time (Uchinanchu, 1981:149).

七  
六

何よりも私はオキナワンである。しかしオキナワン2世であること

## カハルウの記憶 - オキナワン2世の意識とかたち -

をどう感じるかと問われたら、簡単な答えはない。両親が沖縄出身であるからと言って、自分が他人よりも劣るとも優れているとも思わない。(中略)自分が他の日系アメリカ人と「異なる」と感じることもない。その上、自分がとりわけ「オキナワン」だとも思わない。だが初めからこのように感じていたわけではない。長い間、そうではなかった。(執筆者訳)

イゲ氏の言う「No, it wasn't like that for a long time」は彼の生まれ育った環境が物語っている。イゲ氏の場合はカハルウ (Kahaluu) という地域で生まれた。そこはバナナ栽培が盛んな地域だった。しかし彼にとっての一番古い記憶は、モロカイ島 (Molokai) にあるマウナロア (Maunaloa) のパイナップルプランテーションだと言う。そこで初めて自分がオキナワンであることを認識した。その後も度々自分がオキナワンであることを感じさせられる出来事を経験し、オキナワンであることを恥じる思いもした。逆にオキナワンであることで良かったことでさえ、どこか彼の心には常にオキナワンであることへの恥じらいのようなものが存在し続けた。しかし日本が真珠湾を攻撃したことにより、日系人とオキナワンの民族的差異が消えた。出身がどこであろうと、アメリカ人にとって日系人もオキナワンも皆「日本人」となったからである。そして彼の「オキナワ」や「オキナワン」という言葉に対する感情も、沖縄戦の話題をラジオを通して聞いたときに、もっとその言葉を聞きたいというものに変化していったと、自身の心境の移り変わりを *Uchinanchu: A History of Okinawans in Hawaii* の中で記している (1981 : 149-159)。

七五

I can say that the war years were the turning point for me as an Okinawan, a Japanese, and an American. ... Rather than seeing

these elements as conflicting parts of me, I see them as enriching and strengthening me in coping with life by providing me with otherwise unavailable choices from three or four cultures. I accept, respect, value, and enjoy each of these parts of me (Uchinanchu, 1981:160).

フィリップ・K・イゲ氏にとって「オキナワン」であることは恥であった。それはプランテーションや学校などの場で経験した事柄が彼の恥じる思いに影響しており、この「恥」という感情は、これまでに出版・記録された多くの書物に登場するオキナワンの感情である。しかし彼の場合、第二次世界大戦がきっかけとなって、オキナワンであることへの意識が変わっていった。そして一度戦争によって消えたと思われた日本人とオキナワンの民族の境界線は、目に見えて存在はしていないが、彼の「for me as an Okinawan, a Japanese, and an American」という言葉にも表れているように、オキナワンとしての意識がかたちを変えて存在していることが分かる。

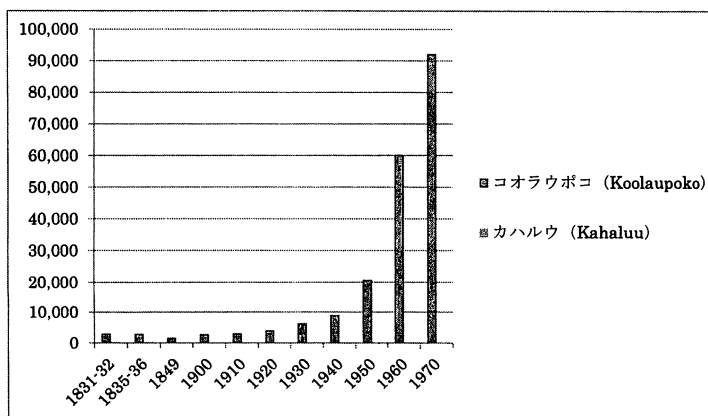
先述したように、全ての2世が同じ経験をしたわけではない。確かに9人兄弟の長男（1924年生）、次男（1931年生）、三男（1936年生）にインタビューを行った時も、それぞれが違った経験をしているため、オキナワンであることをどのように意識したかという経緯（かたち）については異なっていた。しかし、彼らにとってアメリカ人であることが第一の意識（アイデンティティ）だとすると、第二の意識（アイデンティティ）の表し方こそ違えども、オキナワンであることへの誇りのようなものが存在することは確かなようである。では実際、現在もハワイ・オアフ島に暮らすオキナワンは、オキナワンであることをどのように考えているのであろうか。



## 2. カハルウ・コミュニティ

ここでは、カハルウ (Kahaluu) に暮らしたオキナワンの家族を取り上げ、彼らがどのようにしてオキナワンであることを意識して育ったかを探っていきたい。その前に、カハルウ・コミュニティとはオアフ島の中でどのような場所であるかを紹介したい。

カネオヘ (Kane'ohe) はオアフ島の西部にあり、コオラウポコ地区 (Koolaupoko District) に属する地域である。カネオヘ湾にこの地区一帯が面しており、北からクアロア (Kualoa)、ハキプウ (Hakipuu)、ワイカネ (Waikane)、ワイホレ (Waiahole)、カアラエア (Kaalaea)、ワイヘエ (Waihee)、カハルウ (Kahaluu)、ヘエイア (Heeia)、カネオヘ (Kane'ohe) の地域が集まる。2010年の時点でのカネオヘ (Kane'ohe) の人口は約34,597人で、アジア人の割合は36.9%である<sup>1</sup>。カネオヘとカハルウの人口の推移は以下のとおりである (表1)。



(表1) 1831-1970年のコオラウポコ地区の人口の推移<sup>2</sup>

カハルウ (Kahaluu) に住む人々の住まいは、主要道路よりやや奥まった所に集中している。2014年の現在も、緑が生い茂り、雨が降れば山々から雨水が滝のように流れ落ちる様を見ることができる自然豊かな地域である。またカハルウは「オキナワン・タウン」とも呼べる場所である (Ige, 1989)。トム・イゲ (Tom Ige) によれば、1920年までには100家族中、約80%がオキナワンの姓を名乗っていたと言う。ナカマ、ヨギ、アサト、ヒガ、アフソ、イゲ、セリカク、コガチ、アゲナ、ヨナシロ、コバシガワ、コチ、ツハ、トグチ、ナカダ、ギノザ、キヤブ、オシロ、ミヤシロ、ヤマシロ、ヤマノハ、ヨナミネ、ギマの姓を本文中で示している (Ige, 1989 : 2)。ここに住む人の大半がオキナワンの姓を名乗っていたことで、日系人との間の差別も感じず、他の地域では躊躇われていた沖縄の音楽や踊りも、ここでは隠されることはなかった。そのため、イゲは幼い頃から沖縄の文化に慣れ親しんで育った。では同じ頃、カハルウで育ったもうひとつのオキナワンの家族はどうであったろうか。

2012年と2013年に計3回のインタビュー調査を行った。そこで得られた情報をもとに、カハルウの地域像を描き出し、カハルウに長年暮らしている人物がどのようにしてオキナワンであることを意識し始め、現在に至るかを考察していきたい。

この家族は両親 (オキナワン1世) と9人の子ども達とともに暮らしていた。最終的な住まいを構えるまでは、カネオヘ地区の中を3回ほど転々とした。9人兄弟の内、3男で末っ子のL・S・アサト (仮名) は1936年生まれで、兄弟の中では一番カハルウに長く住んでおり、現在もカハルウで暮らしている。よって、ここでは彼の証言を重点的に取り上げる。

L・S・アサトの両親の名はテイコとウシで、テイコは1913年にハワイへ渡った。2人は1916年に婚姻届を出し、ウシは1917年にテイコの待つハワイへ渡った。そして2年後の1919年に第1子で長女が誕生する。その後

## カハルウの記憶 - オキナワン2世の意識とかたち -

1921年に次女、1922年に三女、1924年に長男、1926年に四女、1929年に五女、1931年に次男、1934年に六女、1936年に三男・L・S・アサトが誕生する。彼らはプランテーション労働というよりも、養豚業や農業を中心に営み、家計を支えていった。そしてカネオヘで第二次世界大戦を経験している家族でもある。

テイコとウシは島の中心部のワヘワ (Wahiawa) という地区から生活をスタートさせた。その後、真珠湾に近いパール・シティ (Pearl City) に移り住んだ。ここで長女・次女・三女・長男・四女・五女までが生まれた。1919年から1930年まで住んでいたことになる。五女の話によれば、父親はパイナップル畑で働いていて、母親は子供が幼いこともあり、専業主婦だったと言う。そして風呂が家にあったことを鮮明に覚えていた。薪を使って風呂の湯を沸かしていたと言っていた。

1930年頃、家族はオアフ島の西側にあるワイカネ (Waikane) という場所に引越した。兄弟はここから学校へ行くようになったと言う。学校は小学校と日本語学校へ行ったと言っていた。長女の兄弟・姉妹は口を揃えて長女が一番優秀だったとインタビューの中で語ってくれた。とにかく、この頃はまだ日本語学校へ行くことができ、日系人やオキナワンは親に行かされていた。L・S・アサトのように生まれの遅い2世は、途中で太平洋戦争が始まってしまったため、日本語学校が閉鎖されてしまったという事例もある。

1931年に次男が生まれてからはワイホレ (Waiahole) に移った。この辺りがカハルウと呼ばれる地域で、この家族はここに腰を据えることになる。ここで六女と三男・L・S・アサトが生まれる。この時点で姉や兄は結婚し、別の場所に移り住んでしまっていたため、この地域の様子の証言は主に六女とL・S・アサトによるものである。ここでの生活は主にタロイモの栽培やフルーツなど、収穫したものを市場に持って行き、その売り上

## 国際日本学論叢

げで生活をしてきた。この周辺一帯は、1800年代からタロイモ、さとうきび、パイナップルなどの栽培が盛んで、家畜を放牧する牧草地も広がっていた。1900年代も、同じように暮らしていたことが分かる。

また、L・S・アサトのインタビューから得られた情報のひとつに、この地域にはオキナワンが多く住んでいた、というものがあつた。先述したトム・イゲの記録と重なる。L・S・アサトは当時の自宅の周辺地図も描いてくれた。それによれば確かにオキナワンの姓がたくさん書き込まれている。例えば、セリカク、ヒガ、ヤマシロ、ヨナシロ、アラシロ、ミヤシロ、ツハ、ヨギ、アサトなどである。その他に日本姓が数名、中国姓や韓国姓が1人か2人見受けられるが、「オキナワン・タウン」と呼ばれるように、オキナワンの姓が非常に多い。

L・S・アサトは、幼少期からの自分の経験を話してくれた。以下は2013年に行った2回目のインタビューの内容である。インタビュー内での使用言語は英語のため、執筆者が訳している。

私の父親は、私が1歳の時に沖縄に戻っている。そして1939年に沖縄で亡くなっているため、父親の記憶はない。そして母親も体が弱かったため、私にとっての母親は姉達だった。

父親がハワイにいた頃はパイナップルを栽培して生計を立てていた。けれど、それ程上手くはいかなかった。1937年に父親が沖縄へ発つた後は、パイナップル栽培も続けていたかもしれないが、バナナやパパイヤかな... 作物の栽培も試みた。これらはワイカネ (Waikane) に住んでいた頃の様子だが、カハルウ (Kahaluu) に移り住んだ理由は、タロイモが栽培できる畑があつたからかもしれない。

タロイモの栽培は大変な仕事。常に体は水で濡れていた。2エーカー (約2,300坪) 程のタロイモ畑を持っていたが、水路を掃除したり、

## カハルウの記憶 - オキナワン2世の意識とかたち -

肥料を与えたりと、大変な作業だった。近所の仲間が水牛で畑を耕してくれたけれど、残りは全て手作業だった。袋にタロイモを詰め、約50キロの袋を抱えてトラックに積み込んだ。一袋で4ドル~4ドル75セントの稼ぎだった。5ドルは貰えなかったと思う。タロイモ栽培には水が欠かせなかったから、水を巡るいざこざも多少はあったけど、それはその時代での出来事だから仕方ないこと。オキナワン1世と私達との軽い口喧嘩のようなものだったよ。タロイモ栽培に従事していたのは、ほとんどオキナワンだったからね。この地域は特にオキナワンが集中して暮らしていて、オアフ島ではとても珍しい場所だった。こうした農業の仕事は各家庭がそれぞれに行っていた。助けが必要な時、例えば畑を耕したい時は、水牛を飼っている家庭に手伝ってもらったりした。

この地域の沖縄連合会のようなものは存在したのか、という質問に対しての答えは「無かった」という答えが返ってきた。人が集まる場所といたら、近くにあった教会と、日本語学校だったと言う。だが、たくさんのオキナワンが住んでいたせいか、隣人同士で結婚する場合も非常に多かった。L・S・アサトが描いた地図を参考に、このオキナワンが隣に住んでいたオキナワンと結婚したとか、この地域の住民全てがひとつの家族のようにも見えてきた。

教育もインタビューの話題に上った。

オキナワン1世たちは本来、最低でも6年生までの教育を受けられるはずだった。けれど実際は受けていない人たちがほとんどだった。だから、私の母親のように読み書きができる人が、その地域の秘書のような存在となったんだ。私の母親は6年生までの教育を沖縄で受けら

れたんだ。その時に英語も学んだ。筆記体で書くことを学んだんだ。それも沖縄で。

1879年生まれだということからしても、当時6年生までの教育を受けられたことがいかに珍しいことであったかをうかがうことができる。自身の教育に関しては以下のように語った。

小学校1年生の時は少人数のクラスが多かった。おそらく、どのクラスも20人くらいの生徒数だったと思う。その当時は、もし進級できなければ同じ学年を繰り返した。だから私の場合、いつも周りは自分よりも年上の人たちだった。教師に日系の人はほとんどいなかった。高学年になると、中国人、白人、オリエンタルの先生になった。日本人の先生もいたかな...。「デアイ」という姓は日本人？「D-E-A-I」だったかな。

学校の給食は好きだった。家を出される料理とは違った。初めてマクドナルドのようなファーストフードが街にやってきたような感覚だった。家が出るのは典型的なオリエンタルでオキナワンの料理だったからね。でも学校ではアイスクリームやミルク、ハンバーガーなど、家には無いような物が出されるから、天国のようだった。

インタビューの最中、度々料理の話題が出て、家庭の食卓には沖縄の料理と日本的な食事が出されていたと言っていた。その後、L・S・アサトの母親の話題に戻る。母親との会話にはどの言語が使われたのかを知りたかったからだ。

母親は両方の言葉を使ったよ。両方というのは日本語と沖縄の方

## カハルウの記憶 - オキナワン2世の意識とかたち -

言。近所の人は、沖縄の出身地の方言が混ざっていたけど、母親が理解できる程度の沖縄方言を使っていた。時には3、4つの言葉が一度に聞こえてきたこともあった。つまりピジン・イングリッシュ。でも彼女は、今日の学校で沖縄方言として習う言葉を話していた。沖縄方言には3つの階級があって、いわゆる正規の言葉が話せないのなら、方言を使うなどさえ言われたのを覚えている。

L・S・アサトは今でも沖縄の方言を幾つか覚えている。2012年のインタビューでは、家族も含め、周囲のんびとが沖縄の方言で会話をしていたから、方言が聞こえてくることが心地よかったと言っていた。実際に沖縄の言葉を話すことはなかったかもしれないが、幼少期に聞いた沖縄の言葉の雰囲気は未だにはっきりと覚えている。

最後に、「自分」というものをどう説明するか、という質問を投げかけてみた。以下は彼の言葉である。

I was an American, first, I would think. Umm ... I had a lot of Okinawan friends and families and my mother spoke the language so...I get basically two cultures all at one time so... It was a mix thing like going to church, we had Methodist Church nearby so we went, you know, mostly for gathering, a gathering place, so...being a Christian or being a Buddhist or whatever, it's kina ("kind of" in English) loose. I guess I call myself more ancestral, like a typical Okinawan. ... What my mother used to tell us about the old country (Okinawa) and stuff are ... maybe the reason why I felt that attachment when I went there, my first and second time, it was like going back home. It's something that you cannot express all that,

you know, feeling that cannot be expressed.

カネオヘ (Kaneohe) 地区の中のカハルウ (Kahaluu) という地域像を探り、さらに、ひとつの家族についてみてきた。結果、カハルウは当時稀に見る「オキナワン・タウン」であったこと、そして周囲がほとんどオキナワンであったため、沖縄の文化は日常的に見られる光景だったことが分かった。正確な理由は分からないが、L・S・アサトによれば、カハルウ周辺には、もともとプランテーションがあり、それが閉鎖されると、プランテーションで働いていたオキナワンの多くが残り、タロイモなどの栽培を始めたのではないかと言っていた。

彼らの場合、オキナワンであることを意識し始める経緯が異なる。プランテーションで見られたような、日系人とオキナワンとの差別感情でオキナワンであることを意識したのではなく、周囲の環境が大きかったことが分かった。沖縄の方言を聞いて育ち、沖縄の料理を食べて育った。当時のオアフ島の中で一番、沖縄に近かったのではないか。

最後にL・S・アサトは沖縄を訪れた時の感情を「it was like going back home」と言っていた。オキナワン3世の女性にインタビューした際も同じことを言っていた。彼女は「やっと戻って来た気がした」と、その時の感情を表現していた。L・S・アサトとこの女性の場合も、幼少期から沖縄の文化の中で育った。世代は違うが、オキナワンであることを意識させる鍵は、やはり幼い頃の経験が強いように感じられる。L・S・アサトは、今日に至るまで、毎年オキナワン・フェスティバルのボランティアを務めたり、彼の先祖の出身地である与那原の町人会主催のピクニック文化を継承するなど、オキナワンであることを誇りに思い、活動に励んでいる。



### 3. おわりに

「オキナワン2世」と言えば、その年齢の幅は大きい。本論文では1920年代と1930年代に生まれたオキナワンを取り上げた。オキナワン2世というのは、プランテーションを経験している者もいれば、全く経験していない者もいる。その為オキナワンであることを意識させるきっかけが異なる。

さらに、アイデンティティ・シフトを経験した世代でもある。もしプランテーションでの生活の経験がある人ならば、第一にアメリカ人としての意識があり、第二にオキナワンとしての意識があったであろう。それが太平洋戦争によって日系人もオキナワンも包括的に「ジャパニーズ」となる。その後、オキナワンという意識が復活する。

L・S・アサトのようにプランテーションを経験していない2世からすれば、常にアメリカ人としての意識とオキナワンとしての意識が並行していたと言えるのかもしれない。

今回、カハルウというひとつの地域に絞り、さらにカハルウで暮らすオキナワン2世から当時の様子と家庭環境を聞くことで、いかに生まれ育った環境が個々の意識に影響を与えるかを知ることができた。

カハルウとその周辺地域の約80%をオキナワンが占め、その他ハワイアン、コリアン、チャイニーズ、ジャパニーズが少数だが暮らしていた。大半がオキナワンだったため、沖縄の文化に触れるのは容易であった。沖縄の方言が聞こえてくるのは日常的なことであり、料理や音楽、踊りなども隠されることはなかった。トム・イゲやL・S・アサトの場合、差別という負の意識ではなく、ごく自然なものとしてオキナワンという意識が形成されたと言える。そして生活の一部として継承されていったのである。

六五

本論文は、全てのオキナワン2世が同じようにオキナワンであることを意識している、ということ結論するものではない。実際、L・S・アサト

にインタビューを行ったと同時に、オキナワン2世半(父親はオキナワン1世だが、母親はハワイで生まれたオキナワン2世。本人が「two and a half generation」と冗談のように表現してくれた)の妻、M・アサト(仮名)にも話を聞いたのだが、彼女の場合、母親がハワイ生まれであったため、オキナワンであることを幼少期は意識しなかったという。意識するようになったのは、夫の家族と接するようになり、沖縄の文化を教わるようになってからだと言っていた。オキナワンという意識に束縛されたことは無く、今でもあまり強くないと言う。ともに同い年だが、育った環境によってこのように意識に差が出る。しかしカハルウという地域と一人のオキナワンを取り上げることで、当時の地域の様子や、オキナワン2世として生きる人物のオキナワン・アイデンティティ形成の過程を記録することができた。そのように、ハワイにおける地域コミュニティの特性と、その歴史と、家族のありよう、そして個人としてどのように生きてきたかなど、複数の要素が関わり合うことで、オキナワン・アイデンティティのもちかたが異なるのではないかという仮説を立てることができる。今後も実例を取り上げることにより、アイデンティティ形成のしくみを考えたい。

#### 注

<sup>1</sup> United States Census Bureau. "Kaneohe CDP QuickFacts from the US Census Bureau." N.p., n.d. Web. 21 June 2014. <<http://quickfacts.census.gov/qfd/states/15/1528250.html>>.

<sup>2</sup> Kane'ohe, a history of changeに示されている表を基に作成。

#### 引用・参考文献

- 岡野宣勝 2010年「戦前のハワイ日系社会における「ナイチ人／オキナワ人」関係について —「日琉同祖論」と「日琉異祖論」の対峙—」『民俗学研究所紀要』第三十四集：111-137 東京：成城大学民俗学研究所
- Devaney, Dennis M., Marion Kelly, Polly Jae Lee, and Lee S. Motteler. *Kane'ohe, a history of change*. 1982 ed. : U.S. Army Corps of Engineers, 1976. Print.
- Ogawa, Dennis M., and Glen Grant. *Kodomo no tame ni - For the sake of the*

カハルウの記憶 - オキナワン2世の意識とかたち -

*children : the Japanese American Experience in Hawaii*. 1978. Honolulu: University Press of Hawaii, 1985. Print.

*Uchinanchu: A History of Okinawans in Hawaii*. 1st ed. Ethnic Studies Oral History Project, United Okinawan Association of Hawaii, University of Hawai'i, 1981. Print.

"United States Census Bureau." *Honolulu County QuickFacts from the US Census Bureau*. N.p., n.d. Web. 17 June 2014.

<<http://quickfacts.census.gov/qfd/states/15/15003.html>>.

"United States Census Bureau." *Kaneohe CDP QuickFacts from the US Census Bureau*. N.p., n.d. Web. 21 June 2014.

<<http://quickfacts.census.gov/qfd/states/15/1528250.html>>.

### インタビュー

ハワイ・オアフ島 2012年9月 録音・録画。

ハワイ・オアフ島 2013年2月 録音・録画。

ハワイ・オアフ島 2013年7月 録音・録画。

## **Remembrances of Kahaluu: Self-Awareness and the Shape of Second Generation Okinawan Identity**

Stephanie Yuuko Iso

*Doctor's Course, Major in Japanese Literature, Graduate School of International Japanese Studies Institute, Hosei University*

### **Abstract**

It is known that Hawaii was one of the destinations for Japanese immigrants and that the sugar cane plantations were one of their main sources of work. Among these immigrants were Okinawans, the group of people from the islands of Okinawa. The Japanese from mainland Japan were in the lowest rank of the “plantation hierarchy,” however, this changed once the Okinawans arrived. Within the label “Japanese,” the mainland Japanese distinguished themselves from the people of Okinawa. Aware of this, soon, the latter started to call themselves “Okinawans.”

There are not many studies with regard to Okinawan immigrants who lived away from the plantations. This research paper focuses on a community in one area of the island of Oahu, Hawaii, the town of Kahaluu. It discusses how the second generation kept their Okinawan identity by looking at their communities, their upbringing and lifestyle. Although this paper does not conclude that all of the Okinawan second generation keep their Okinawan identity in the same manner, it provides a glimpse of how the preservation of the Okinawan identity comes in many different forms, whether it is through the characteristics

カハルウの記憶 - オキナワン2世の意識とかたち -

of the community in which one lived, one's family, or simply through the will of the individual. Regardless, one's awareness of being "Okinawan" is very clear. The research is based on interviews of people who lived or are currently living there, which additionally helps to provide information of what Kahaaluu was like in the 1930-40s.